

【書評】

常石敬一

『731 部隊全史—石井機関と軍学官産共同体』(高文研 2022)

評者：山口直樹(北京日本人学術交流会責任者)

本書は、ほぼ 40 年の長年にわたって関東軍防疫部隊、すなわち 731 部隊の研究に取り組んできた常石敬一氏の 731 部隊研究の集大成というべきものである。

まず、最初に本書の構成を示しておこう。

はじめに なぜ今石井機関(731 部隊)を取り上げるのか。

序章 731 部隊—特別な存在

第一章 窮地の軍医学校—東郷部隊と石井式濾水機

第二章 石井機関—組織者石井四郎

第三章 1932 年満洲コレラ調査—石井機関の原点

第四章 平房の本部建物：上意下達の研究体制

第 5 章 「北向け南！」大失態と新たな情報収集が必要に

第 6 章 切り札 PX

第 7 章 敗戦—世界は冷戦へ

第 8 章 負の遺産：石井機関と日本の医学界

第 9 章 復活する「消えた細菌戦部隊」・輸血と BCG

終章 科学・技術・社会：歴史・現在・未来

「はじめに」において常石氏が、新たに 731 部隊についてまとめたいと思った理由が述べられている。それは、2015 年に防衛省が、大学などの科学研究を補助する制度(安全保障技術研究推進制度)を始めたことがきっかけだったという。これは大学などの研究を防衛省の研究開発のネットワークに取り込む軍事研究への誘導でありそのことの問題点を訴えたかったのだと述べている。

常石氏はいう。軍事研究はどこの国でもやっている。それでも軍事研究を問題視するのは、非軍事の科学研究にとって有害なものになっているからだ。

科学研究の基本とは自由と公開であり、この自由は誰もがもっている基本的人権における自由を意味し、科学の名のもとに人を殺傷する自由は認められていないのだ。

科学者の知見は、科学界を含む社会に対して公開されており、その利用は自由であって科学者はそれを利用して自分の研究の出発点を決めることができる。

こうした研究の見極めは、だれでもやっていることであって、これから自分が進む分野の前線配置を知ることで研究の方向性を決めることができる。

研究の自由の第一歩は研究のテーマ選択だが、それ以上に重要なのは、発表の自由である。

軍事研究における人体実験などで違法な研究であれば、発表することができないが、研究の基本は発表の自由にあるといい。学術論文は、誰もがアクセス可能と公開の原則が存在する。

軍事研究においてはこの公開の原則が守られない。

軍事研究は、寄生虫的存在だが、十分な研究費に恵まれ、戦争となれば、湯水のごとく資金が提供され、軍事研究の産物が、ある日突然人々の前に現れる。

その典型として常石氏は、原子爆弾をあげている。

ソ連が原爆の実用化を考えはじめるのは、1945 年 8 月に広島、長崎で示された圧倒的な力を見てからであった。

日本陸軍の細菌の秘密兵器、PX とよばれたペストノミを世界が知ったのは、1940 年、上海対岸の街寧波に航空機から PX が散布され、数日後にペスト患者が出てからだった。

原爆開発が可能と考えられる 1940 年 5 月からは米国では核分裂関係の論文、各学会誌への掲載が差し止められた。研究情報が、6 年間ストップし、研究の空白期が生まれた。原爆の秘密が公開されたのは 1946 年からだったという。

軍事研究では科学者というヒト、研究材料・原料というモノそれに研究費というカネがふんだんに投入されるが、それに見合った結果がでていないだけでなく後世に深い傷跡を残した例として米国のマンハッタン計画と石井機関(731 部隊)の 2 つをあげている。

また、ここでは常石氏の歴史に対する証拠のないものを取り入れることはできないという徹底的に実証的な姿勢が記されている。例えば

「時間軸も事実も僕独自のもので個人的な思いと無縁ではありえない。しかし、僕の想いを歴史に語らせる、歴史を自己主張のために利用する、という高慢不遜な態度は研究者としては決して許されない。自分を律することができていうかどうかは読者の判断に待つ」(6 頁)

という部分がそれである。

ここには、歴史的事実に対する謙虚さと厳格さを感じ取ることができる。

このような姿勢を持つ常石氏には、近年の日本政府の歴史への向き合い方には大きな疑問を持つものに映っているようだ。

たとえば常石氏は書く。

「これまで日本政府は、自国の負の歴史から逃避することが多いが、近年政府統計も信頼できなくなっている。2020 年には勤労統計の調査漏れが明らかになっている。さらには 2021 年には都道府県の「建設工事受注統計」という国内総生産 (GDP) の算出にも用いられる基幹統計を国交省

が書き換えていたことが明らかとなった。

確実な証拠に基づかない歴史研究はフェイクである。

今の日本はその存在自体がフェイクになってしまっているのかもしれない。

この国で、確実な証拠にこだわることに虚しさを感じる。」(7頁)

「今の日本はその存在自体がフェイクになってしまっているのかもしれない。」とは、常石氏の日本政府に対する強烈な皮肉である。

これに続けて「僕たちにできることは日本が実体を伴った国として自立するよう、政府が歴史的事実を含め確実なデータ、証拠を残し生かすよう監視をし、信頼できる実績にもとづいて国を動かすことが民主国家として「当たり前」なのだというカルチャーを確立することだ。本書がそのカルチャー作りの隅っこの一端を担うことを願っている」と記している。

逆に言えば、現在の日本政府においては、まったく「当たり前」ではなく、後退の傾向も見せているという現実を我々は見て取ることができる。

序章では、1936 年から 1945 年までハルピンに本部のあった 731 部隊が、1945 年 8 月 9 日にソ連が満洲に攻め込んできたとき、日本陸軍は、731 部隊の即時撤退を決めていたことが述べられ、いかに 731 部隊が、特別な存在であったかが指摘されている。

それは 731 部隊が、人体実験をしていたからで国際条約のジュネーブ議定書で戦争での使用が禁じられていた細菌兵器の研究開発及び使用をしていたのであり、この二つの融合による人体の兵器化を隠すことが最優先の課題で、それが素早い日本への帰国となったのだった。石井のメモの「先にす」は、人体実験に関わっていた人および PX 関係者から帰国させることを意味していたという。(17 頁)

本書によれば、731 部隊は関東軍防疫(給水部)の通称号で、公文書で見るとは、その名でよばれたのは 1941 年前後の 1 年間だけだったという。731 部隊は隊員数 3000 人ほどの部隊で石井機関とよばれた総員 1 万人を超える組織の一部分だった。石井機関には 731 部隊の姉妹組織、防疫給水部が中国の北京、南京、広州、それにマレー半島のシンガポールに存在し、それぞれの地域にあった細菌戦および給水活動を行っていた。その全体をまとめたのが、東京の陸軍医学校の石井の研究室である防疫研究室であった。

1931 年 9 月に満州事変が起こり、それによって満洲事件費という戦時特別予算が生まれ、軍の年間予算が倍増した。満洲事件費によって石井機関の本部である防研の施設が、軍医学校に設けられた。満洲事変から半年後の 1932 年 3 月 1 日、満州国が日本の後押しで建国され、関東軍が、満洲の全域に駐屯することになった。

陸軍軍医学校は、1920 年以降、行政処分の対象になり、その存在は危機を迎えていた。

満洲での戦争の始まりは、軍医学校にとっての好機到来であった。

開戦直後の 1931 年 10 月 12 日の第 4 回臨時行政財政審議会総会で軍医学校の根本的整理が決まっていた。そこで陸軍軍医学校は、生き残り策として満洲進出を考えていく。

生き残り工作の中心人物は、化学兵器の基礎を築いた小泉親彦軍医監であり彼の懐刀の石井

三等軍医正だった。小泉が石井を使って推進したのが医学兵器開発で、その中身は盾が石井式無菌濾水器で、矛が細菌兵器だった。

満州国が建国された 1932 年夏、満州全域でコレラが流行し、患者が 9300 人が出て 6300 人が死亡した。病原体の兵器としての使用を企んでいた石井にとっては、これは願ってもないチャンスだった。

石井は医学者ではあるが、細菌学が専門で治療はやらない。

彼らがやったのは流行につながる情報の収集、流行の速度や広がり調査、各地で流行の原因となったコレラ菌を集めることだった。

石井は集めたコレラ菌を東京に持ち帰り、部下の軍医 3 人に分析させた。

その分析で分かったことは、細菌の感染力は長期保存すると低下するという事実だった。

病原体の兵器化にとって、保存菌は感染力を失う事実と、他方で動物の体内を通過させることで回復・増強ができるという知見は重要な発見だった。この発見に基づいたより強力な病原菌を得る確実な道が、病原体をモルモットではなく人間の体に通す人体の兵器化だった。細菌兵器部隊としての石井機関の原点が、1932 年から翌年にかけてのコレラ流行調査と、その後の現地で集めた菌の分析ということだった(22 頁)

731 部隊は 1936 年 8 月、数年間の背陰河での秘密活動を経て、関東軍の正式な部隊、関東軍防疫部としてハルピン郊外の平房でスタートした。

しかし部隊の要員もそろわず、また施設も未整備状態での発足だった。

約 1 年後 1937 年 7 月、新たな戦争、支那事変が始まり、ハルピンでの部隊整備に遅れが出た 1941 年 4 月に 731 部隊にとっての新兵としての第一期となる 300 人が加わり防疫防水部としての体制が整った。その年末 12 月 8 日、日本は米国など連合国に対して宣戦布告をし、世界大戦に参加することになった。その時の衝撃を 300 人の新兵の一人、熊本鉄雄は「北向け南!」の号令と記しているという。それまで日本の仮想敵はソ連だった。

731 部隊の細菌戦準備もソ連が対象であり、中国中部への町への細菌攻撃はそのための試験的攻撃、試行だった。ところが敵はアメリカに突如かわるのである。

そこで 1944 年、731 部隊は 17 人の部隊員を最近攻撃のためにサイパン島に送り出した。

サイパン島が陥落すると米軍機の日本本土攻撃の基地となる。

それを阻止するために島をペスト菌で汚染する計画だった。しかし 17 人は現地に到着することができず、計画は失敗に終わるのである。

ここで本書の副題となっている「石井機関と軍学官産共同体」について常石氏が説明した部分を取り上げる。

常石氏は 29 頁で以下のように記している。

「石井機関の構造は、防研を頂点とした 731 部隊などの防疫給水部という軍事組織と防研を窓口として日本医学界の人材や情報を活用できるネットワークになっていた。

防研を通じて研究費を供給したり研究上の便宜を図ったりするなどして、学界を軍に取り込んでいた。その具体例が大学の医学部部長クラスのボスを防研囑託に据え、その弟子を 731 部隊など

に派遣させたことだった。石井機関とは日本医学界のマンパワーや研究上の知見やノウハウを軍で利用するための仕掛けだった。軍国主義全盛の時代とは言え、医学界は命令によってそれらを提供したのではなく、先の研究上のメリットだけではなく兵役免除の期待などギブアンドテイクの関係だった。石井は今風の言い方ではウインウインの軍学官産共同体を作り上げていった。」

石井は 1924 年から 2 年間研究のため陸軍から京大に派遣され、博士論文を書いていた。

石井は、その間、京大総長だった医化学者、荒木寅三郎に接触を図り、石井機関への支援を取り付けている。そして荒木寅三郎の娘と結婚までしているのである。荒木寅三郎は、1936 年に岡山医科大学で「学業と人格」という講演を行っている。娘婿の石井四郎の人格を考えると皮肉な講演になっていると言わざるを得ない。

また、軍医なる人間にとっては軍の囑託となると軍に招集されないことも大きなメリットだった。その意味では大きな特権が付されていたのである。特権をもった専門家には大きな責任が伴うが、その責任を果たそうとしたものは少ない。

もうひとつ軍学官産共同体にとって重要なことは、1932 年、防研がスタートした年、日本で新しく大規模な科学研究支援制度がはじまったことである。

すなわち日本学術振興会の発足である。

それまでの研究者が個々別々に自分の研究を進める科学技術研究の体制では、欧米でのチームプレーによる研究の発展のスピード、それにより生み出される学際領域の急速な広がりに対応できなくなった現実があった。学振は研究補助金をインセンティブに研究者相互の連携を高めた共同研究を生み出したのだった。(29 頁)

そして、常石氏は、学振の補助金の特徴を次のように書いている。

「学振の補助金の特徴は、多額の補助金を所属の違う研究室のチームに配分し、総合的な研究活動を誘導したことだ。そのモデルとなったのが、理化学研究所の物理学者、仁科芳雄の研究室だった。同研究室には物理学者だけでなく化学者、さらには後に日本医師会長となる武見太郎まで加わっていた。そのスタイルについて物理学者の伏見康治は、仁科が理研を離れなかったのは「その工場的性格の研究」体制が必要だったからと記している。

学振の第 10 小委員会の研究目的は宇宙線・原子核だが、それは実質的に理研での仁科の研究をさらに発展させることだった。第 10 小委員会への補助金は、1934 年から 42 年の 9 年間で 44490 円に達した。年平均にすれば 50,000 円弱で民間の工学系研究機関の平均年間研究費の 2 倍だった。」(30 頁)

仁科の研究チームにはさまざまな専門の研究者が参加していたが、全員が学界の人間であり、研究共同体ではあっても、軍学共同体などではなかった。

のちに原爆の研究にはいつて軍との協力関係ができ軍学共同体になっていくが、石井機関もまた医学者たちを軍に取り込んで軍学官産共同体を形成していった。

その場合、さまざまな研究者が参加する総合研究という性格を持つ研究になっていくのだが、それは同時に分業をともなったものであり、個々の研究者には、総合研究の全体像は把握できず、何のための研究なのかが理解しにくい構造が存在することになる。

常石氏は以下のようにも書いている。

「部隊で出世している人の多くは、ランク差による上下関係のなかでの仕事に疑問を感じず、部下にもそれを強制する人々だった。秋元はこう観察していた。

あるものは将来の軍医総監を夢見、またある者はやがて学界に確固たる地位を占めるべくそのために自分の業績を一篇でも多くより増やしておかねばと肩をいからせ胸を張ってやりたい放題のことをやっていた人々であった。」(164 頁)

「石井が求めたのは、上昇志向が強く、自分の研究は「お国のため」と信じ自分にそう言い聞かせ、手段を択ばずにひたすら与えられた課題をこなす研究者だった。

自分が行っている研究の意味や理由を考えたり、疑問に感じたりすることは課題達成にとって時間とエネルギーの浪費とみなしていた。石井にとってそうした問題は 731 部隊あるいは石井機関が判断することであって研究者個人が考えることではなかった。」(164 頁)

また本書が、興味深いのは 731 部隊に参加した医学者の肉声が、たくさん収められていることである。巻末の表によれば、常石氏は、1980 年ごろから 731 部隊にいた医学者と面談や手紙や電話による取材を開始している。具体的な医学者の名前や取材開始時期などが、表から読み取れるようになっている。とりわけ凍傷研究で知られる吉村寿人の場合が興味深い。この私の関心は吉村氏の生まれた兵庫県加東市滝野町という場所が、評者の生まれた場所とほぼ同じという個人的な事情も関連している。

吉村は、1941 年 10 月 26 日満洲医学会で 731 部隊技師として特別講演「凍傷について」を行うなど生理学研究の一環として人体の低温環境への対応を研究してきた。

吉村について部隊で写真撮影を担当していた作宮美雄の「神戸にいる吉村寿人、これは科学の鬼である(冷血動物)」という言葉が甲斐手記に残っているという。(107 頁)

凍傷研究において吉村寿人は主導的な役割を果たしていた。

吉村寿人技師は、常石への手紙で、部隊での活動について説明や弁明を繰り返して、その最後にこう書いているという。「私もまた戦争の被害者なのです」(381 頁)

また吉村氏は常石氏との面会や電話は拒絶したという。

常石氏は、吉村氏に関して

「記憶とはおかしなもので吉村技師は当時のことをこう書いている。

『私の大学時代の同級生である軍医少佐は、自分専用の自動車でハルピンより平房に通っていました。しかし、私ども軍属は一般兵隊並みのトラックで運ばれていました。』

当時の名簿で吉村は、大尉相当の六等で、彼と同時期に京大で医学博士となった佐々木義孝軍医もまだ大尉で、少佐となっている者はいない。26 歳の雇員である西島がバスで、高等官六等の吉村がトラックで通勤というのは考えにくい。手紙の記述は、自分たちは無力な存在で軍の被害者であることを印象づけるために、記憶が混乱しているのだと思う。」(113 頁)

と書いている。なぜ吉村氏だけは、常石氏の電話や面会の取材を拒否したのだろうか。電話や面会で問われると困る事が、あったのではないか。ここからは、自らの責任や問題から必死に目をそらすようとしている感じをうける。

また中国人の命を軽く扱い凍傷の実験台に使うことができたのは、吉村氏に中国人に対する差別意識があったからであろう。

吉村寿人は、戦争責任を問われることなく戦後は、京都府立大学の学長にまで上りつめている。もし大きな特権を付与されていた吉村氏が戦争の被害者ならば、ほとんどすべての人は戦争の被害者であり加害者はいないという不思議なことになる。

石井四郎は、1937 年の日中戦争で戦線が拡大し、日本から中国に多くの兵士が来た時、生水を飲んでしまいこれがペストの流行につながった時、自らの判断ミスを認めず、「敵の謀略だ」といつていたという。これは石井の常套手段で自らを被害者の位置に置いているという点で吉村寿人と共通のものを感じさせられた。またオウム真理教の科学者たちも自分たちはサリン攻撃を受けていると語っていたが、これもまた自らを被害者におく同じ構造ではないかとおもわれる。

また、満鉄中央試験所最後の所長だった丸沢常哉氏は、「政治経済に無知だったために侵略の手先にされてしまった」と姪に語ったというが、吉村氏と丸沢氏の違いはとてつもなく大きい。

石井四郎の後任は、北野政次軍医少将・満洲医大教授だったが、石井も北野も同時に満州での公式の活動を開始した。

これは偶然の一致ではなく医務局として意図的な措置だったと思われる。

また 731 部隊の研究成果は、敗戦による「満州国」崩壊とともに徹底的に隠ぺいするように指示が出されていた。

常石氏は以下のように記している。

「1945 年 8 月 9 日石井は、参謀本部の河辺虎四郎中将、参謀次長名の至急電を受け取った。ソ連参戦に伴う部隊の今後については 10 日に新京につく朝枝参謀の指示を受けるように命じた。10 日午前 11 時、新京の軍用飛行場では、石井は一切の証拠を残すなという朝枝の指示を受けている。朝枝は証拠隠蔽を徹底するために部隊の破壊状況を写真に撮り東京にもってくることを指示したようだ。

石井は部隊破壊によって平房ではフィルムの現像ができなくなったため、11 日、増田薬劑少佐が、操縦する飛行機で大連に飛び、大連支部で写真を用意し東京に飛んだ。」(277 頁)

「敗戦によって石井機関が作り上げた軍学官産共同体は解体したが、帝国陸軍以上の権力をもった GHQ を頂点とする新たな軍学官産共同体が生まれた。」(341 頁)

この軍学官産共同体によって 731 部隊の医学者たちの責任は、免責されていくのである。

実際、東京裁判に昭和天皇や 731 部隊の医学者たちは呼ばれていない。

人体実験と細菌兵器開発で学位を取得した医学者も問題にされている。

人体実験の研究で京大から医学博士の学位を得たのは、平沢正欣軍医少佐で、細菌兵器研究で東大から医学博士の学位を得たのは金子順一軍医少佐であった。二人とも石井機関のノミ研究チームの一員だったという。(323 頁)

石井機関に関連した軍医学将校への学位授与を検証する運動もなされているようだ。

たとえば、京都大学において「旧満州第 731 部隊軍医将校の学位授与の検証を京大に求める会」が主催する講演会が開かれ、2018 年常石敬一氏は、講演を行っている。

8 章「負の遺産－石井機関と日本の医学界」では、731 部隊と深いつながりを持ち、戦後発足した厚生省予防衛生研究所の初代所長であった慶応大学教授の小林六造と 2 代目所長だった東大教授の小島三郎という二人の医学者のことが取り上げられている。

常石氏は、731 部隊と深い関係を持ち、戦争協力と呼び掛けていた医学者の名前のついた学会賞（1994 年に日本細菌学会が創設した小林六造記念賞、1965 年創設の小島三郎記念文化賞、小島三郎記念技術賞、いずれも黒住医学研究振興財団）が存在していることに疑問を投げかけている。

このことに関して常石氏が本書で

「多くの囑託が石井の求めに応じて弟子を石井機関に送り込んだ。戦後そのことに口をつぐみ、自分たちの行為を日本医学の負の歴史を直視することなく医学研究に励んでいる。自らの歴史を直視することなく医学研究に励んでいる。自らの歴史に背をむけて人命の尊さを説いてもそれは茶番だ。」（380 頁）

と述べているのが印象的だ。

339 頁には以下のように記してある。

「1939 年、防研に日本初となる薬や輸血に使える凍結乾燥装置がアメリカから持ち込まれた。1942 年に英米の捕虜のための輸血用乾燥血漿が、赤十字経由で送られてきたことだった。東条陸軍大臣の指示により、陸軍は、乾燥血漿の開発に取り組み、1943 年から本格的に供給を開始した。BCG についても凍結乾燥技術が、完成し、陸軍内部で接種を開始した。

陸軍が開発した凍結人血漿と乾燥 BCG は敗戦で姿を一時的に消したが、占領軍の後押しで 1949 年から 50 年にかけて薬事法による医薬品として認可され、復活を果たした。

乾燥人血漿は、1950 年に日本ブラッドバンク(のちのミドリ十字)を生み出し、乾燥 BCG は、1951 年の結核予防法実施への道を開いた。」

このことによって消えた細菌戦部隊は、復活するのである。

ここで著者の常石敬一氏と評者の個人的な接点を語ることをお許し願いたい。

常石氏の名前は、80 年代から知っていたと思う。しかし、実際にその姿を見たのは 1995 年 3 月のオウム真理教の地下鉄サリン事件の発生後、テレビ番組でサリンの解説をする姿だった。初めてお会いしたのは、20 年以上前の木原英逸氏が、組織されていた東大先端研で行われていた研究会だったと記憶する。その懇親会で私が、関心持っていた新京とハルピンにあった大陸科学院と研究機関で冷凍のための装置が、1930 年代後半に購入されており、ハルピンの大陸科学院には、731 部隊の医学者が出入りしていたという話題を語り合った記憶がある。

その翌年の 2003 年に日本科学史学会の「戦争と科学」のシンポジウムを組織し、常石氏にでももらったのだが、お願いをしたのは、私であった。

その後、私は、北京に移動し、日本を長く留守にすることになったので常石氏と会うことはなかった。リスペクトする研究者がなくなるたびに、「もっと話を聞いておけばよかった」という思いに駆られるが、常石氏の訃報を聞いたとき思い出したのは、2010 年代、科学史家の中山茂氏が北京に来

られた時にお会いした時のことだ。そのとき占領史を研究する市民歴史家の笹本征男氏のことが話題となった。笹本氏はすでにその時なくなっていたのだが、身寄りや家族が、いなかったという話になった。葬儀の時、誰が主催するかということが問題になった時に「常石君がひきうけてくれたんだよ」と中山茂氏は私に語った。

「そうだったのか」と私は思ったことを記憶している。

最後のあとがきで常石氏は「ある時、「ノンフィクションと人間」という「東京新聞」タ刊コラム「大波小波」(2005年9月29日)を送ってくれた。コラムは数か月前に出版された731部隊に関する著作が貴重な労作としながらも『作品から受ける感銘が薄いのはどうしたことか。著者の関心が事実の発掘にのみ止まって、その向こうに見えてくるはずの人間の運命にまで及ばなかったからではないのか』と書いていた。この記事、僕は自戒の意味を込めて今も手帳に挟んでいる。」(415頁)と書いている。猪野修治氏も同様のことを私に語ってくれたことがある。

731部隊研究によって「人間の運命」までいか見せるためには、学識だけではなく詩人や文学者のような感性が求められるところがあるように思う。常石氏にはそれがやや希薄だったということなのかもしれない。逆にそれを持っていたのが、在野の占領史研究者で『いずも』という詩集を刊行していた笹本征男氏ではないかとおもわれる。両者は、相互に補い合うような関係といってよいかもしれない。

笹本氏の葬儀の主催者を引き受けていることからわかるように常石氏は、アカデミズムに軸足を置きながら市民科学にも大きな関心を寄せてきた学者だった。たとえば、常石敬一『3・11 が破壊した二つの神話—原子力安全と地震予知』(お茶の水書房、2015年)の56頁には、市民科学研究室が刊行した翻訳文書『チェルノブイリ事故から25年ウクライナ政府報告書』(2012年)が取り上げられている。

また、上田昌文氏によれば、『神奈川大学評論』の劣化ウラン弾に関する論考(第103号 2023年7月31日刊・所収)について常石氏は、上田氏を指名していたのだという。

常石氏は最後にコロナパンデミックに関する日本政府の対応に関して大日本帝国や大本営の対応と何ら変わるところがなかったと指摘し、「日本では物事がなかなか始まらない。そして一度始まるとそれを止めることは難しい。」と述べる。その原因は、日本の「追いつけ追い越せ」モデルにあるとも指摘している。

西欧にモデルを求めそれをいかにうまく模倣するかを教育の中で評価することしかしてこなかった弊害がでているというのである。

そして最後に以下のような問題提起を行っている。

「問題解くより、何が問題かに気付くことがはるかに重要で難しいのだ。学校優等生は与えられた問題を解くのは、得意でも問題は発見するのは不得手だ。」(387頁)

「これまで日本社会は、問題を解くことに長けた優等生中心に動いており、社会の問題を見つける人は体制から遠ざけられてきた。それが日本社会の硬直性の一因となっている。

現在の COVID19 対策でも政府に遠ざけられている研究者には今の問題とその解決の方向はそれぞれに見えているのだと思う。しかしそれを集めて、国を挙げて立ち向かうという姿勢が政府に

はない。また優等生中心の日本に居場所がなく、外国で大きな成果を上げている研究者を取り込もうという意欲もないようだ」(387 頁)

731 部隊を約 40 年以上にわたって研究してきた常石氏は、2023 年 4 月 24 日がんでこの世を去った。この本が絶筆となり最後の書となったが、この問題提起が常石氏の最後のメッセージとなった。私たちはこの問題提起を断じて「スルー」するわけにはいかない。

当然のことだが、本書のような研究は、一朝一夕にできるものではない。

本書は、1978 年頃に開始され 40 年以上にわたって続けられてきた 731 部隊研究の集大成である。

本書の直接的な執筆動機は、防衛省の研究補助金(安全保障技術研究推進制度)の問題そして石井機関や 731 部隊について証言してくれた人の言葉を世に出すことだったと常石氏は書いている。

防衛省の研究補助金(安全保障技術研究推進制度)の成立、政権による日本学術会議への人事介入、政府による「国立大学法人法の一部を改正する法律案」の国会通過などの動きは、明らかに戦争への布石を感じさせる。まさに日本は危機的な状況にある。この状況の中で 731 部隊のような組織が、これからの日本で復活しないという保証はどこにもない。

戦争と差別の時代を許さないのは、市民科学の基本であろう。

戦争と差別の時代を許せば、日本の市民科学の敗北である。

そうしないためにも本書は何度も熟読される必要がある。

また吉中丈志 編『731 部隊と大学』(京都大学学術出版会 2022 年)も併せて読んでいただくと理解が深まると思う。

なお、本書に索引をつけていただけるとさらに使いやすくなりよかったと思う。